

二〇一四年八月二十九日

本殿へ灯の帯となる万灯会
権禰宜の影忙しげや万灯会
八つ頭阿蘇黒ぼこに太りけり
化粧水よろこぶ肌や今朝の秋
朝露を抱きたるキャベツいただきぬ

二〇一四年八月二十八日

万燈会光りの帯といひつべし
夕闇に浮きたつ白は蕎麦の花
万灯会源氏祖廟の鎮もれり
極彩のパブリカ白磁皿に盛る
池爽涼末広がりには鴨の水尾
本殿を照らして千の灯涼し
境内を埋めつくして万灯会

二〇一四年八月二十七日

虫の声聞くごとく傾ぐ羅漢かな
万灯会源氏の魂の寧かれと
秋日影堰落つ水のしろがねに
玉垣へしだれし萩のいや白し

二〇一四年八月二十六日

秋風にポストのビラのはずれさう
水打たれたる路地裏に風生る

よし子

よう子

よし女

満天

つくし

有香

みちほ

うつぎ

満天

菜々

よし子

雅流

つくし

雅流

菜々

菜々

よう子

さつき

山頂を越えゆく雲に秋惜しむ

夏ばての吾を一喝仁王の眼

若き僧読経の声の爽やかに

頬撫づる風に気配や庭の秋

二〇一四年八月二十五日

雨晴れてより膨れゆく踊りの輪

お化け屋敷出口に母の待ちくれし

秋入り日巨人めくわが影法師

二〇一四年八月二十四日

秋風裡文楽人形肩で泣く

たもとほる池塘にあえか走り萩

傷心の我を慰むちろ虫

二〇一四年八月二十三日

着るものはゆったりが良し夕端居

源流と標立ちたる山清水

枝豆のつるんと弾け口逃ぐる

秋うらら末の孫にも背を越され

露地屋台葎簀にメニュー吊しけり

書に倦みて蟲の音に耳澄ましけり

三刀

つくし

はく子

あさこ

三刀

なつき

治男

宏虎

菜々

かず

よし女

せいじ

かず

はく子

さつき

宏虎

毎日句会みのる選・二〇一四年九月一日